

第 10 回「他者の幸せを求めて（二）」

為政の本質。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 10 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「他者の幸せを求めて」第二回のお話です。

具体的に『論語』の文章を読んでいきます。代表的な文章です。

「子貢 政を問う。子曰く、食を足らし、兵を足らし、民之を信ず、と。

子貢曰く、必ず已むを得ずして去らば、斯の三者に於いて、何をか先にせん、と。

曰く、兵を去らん、と。

子貢曰く、必ず已むを得ずして去らば、斯の二者に於いて、何をか先にせん、と。

曰く、食を去らん、と。古 自ら皆死有り。民信ずる無くんば立たず、と」(顔淵第十二)

長い文章ですが、順を追って、説明していきましょう。

「子貢 政を問う」出だしは少し説明が必要です。

子貢は孔子の弟子です。弟子の中でも中心的な人物でした。

孔子の集団というのは、たくさんの人々が集まっていたのですが、不思議なことに、この人たちが

がどんな生活をしていたのか、あまりよくわからないのです。人間が生活する以上、やはり

生活費は欠かせません。後に話しますが、孔子は十数年の流浪の旅を続けますが、その時にも

たくさんの弟子達がいっしょになって、集団で各地を転々としました。

そのときの生活費はどうだったんだろうか。やはり気になります。

今日では、この子貢という人物が、その経済的な面を支えたということになっています。ただし

子貢が特別にお金持ちで、お金をばらまいたということではありません。

子貢は経済的感覚に優れ、非常に巧みであつたらしい。そこで、子貢が財政的に問題が起こらな

いように努力したと伝えられています。面白いことに、後に、この子貢は、商売の神様として

崇められるようになります。それほど経済的に貢献した人のようです。孔子の弟子の中で傑出

した一人であったことは間違いありません。

さて、その子貢が政を問う。

この「政を問う」という問答形式は『論語』の中にいくつもあります。

学校と言っても、今日の学校と違い、孔子がいて、その周りに弟子がいて自由に討論していた。

今日の学校のように、一時間目は何、二時間目は何というような時間割はありません。いっしょに寝起きして、あれこれと議論をしていたというのが実態です。

当然、弟子たちは、孔子に質問したい重要なことがたくさんありました。

孔子のグループに集まった若い人達は、孔子から推薦を受けて就職していきました。就職先はその大半が「士」にあたる仕事でした。ですから政治とは何か。これは重要なことでした。

孔子の学校では、この「政を問う」、政治とは何かということが、質問の中でも中心だったのです。その例がここに残っています。

子貢が「政を担当する場合に、大事なことは何ですか？」と尋ねました。

すると孔子が次のように答えました。

まず「食を足らし」。

「足らし」とは難しい読み方ですが、伝統的にそう読みます。食べ物を十分に作る。他のことばでいえば、経済的な安定ということですが、これがまず大事であると。経済的安定というときに、「食」ということばを使っているのです、非常に具体的です。

何といっても人間は食べていくということが大事ですから、「食」を十分に作る。

その次、「兵を足らし」。

これは軍備です。軍備を十分に作る。重要なことです。ご承知のように、中国大陸というのはだだっ広い平原ですから、周りを囲むものが無い。万里の長城は、中国北部の遊牧民族の侵入を抑えるためのものです。内部ではあのようなものはありません。しかし、だだっ広い平原では、いつ誰が攻め込んでくるかわからない。中国では、主要都市は周りを城壁で囲んで、その中で

生活をするという形を取っておりました。

ですから軍備、これは十分でなければならぬ。当時としては常識でした。

次、「民之を信ず」。

「之」は政事の担当者のことです。為政者、官僚、そしてその全体を仕切る政治家。それを信ずる、ということが大事、政治に対する信用ということなのです。

「食を足らす」経済的な安定、「兵を足らす」軍備を十分にしておいて外国からの攻撃から守る。

それから政治家が嘘をつかないで政を公正に行う。この三つであるということなのです。

当たり前のことですね。しかし、これがなかなか難しい。基本はこうであると孔子は述べました。

そして子貢は直ちに次の質問をしてきました。

これは、孔子の学校における風景を描いていると思います。弟子もなかなかのもので、次を問うてきます。

「子貢曰く、必ず已むを得ずして去らば、斯の三者に於いて何をか先にせん」

食を足らし、兵を足らし、民が為政者を信ずる、この三つの内で省いてもいいとすれば、どれでしょうか、と。

「曰く、兵を去らん」。

軍備を無くすと見えますが、古来こういう解釈をする人は少ない。軍備を全く無くすことは、当時はあり得ない。「去る」を、少なくする、と解釈する人が多いのです。

あるいは、軍の兵隊というのは税金で、義務として兵役に従事していました。それを減らす。

この解釈が妥当でしょう。軍備費を少なくする。そうすれば予算は余るので、民の暮らしが楽になるだろう。そういうことです。

子貢はさらに突っ込んで聞きます。

「必ず已むを得ずして去らば、斯の二者に於いて何をか先にせん」。

残る二つのうち、もし省くとしたら、と同じように聞きます。

「食」と「信頼」、どうしてもどちらかを減らさなければ、やっていけないとすれば、どちらを捨てますか。これは最後の質問です。

すると孔子はこう答えました。「食を去らん」。

これも「兵」と同じく、飢え死にすることはないように、少なくしようという意味です。経済的などころを我慢しようとした。緊縮財政をする場合にはあり得ます。生活形態を節約するということです。

「古自り皆死有り」

これも、人間は死ぬということはあるんだから、という解釈が普通です。

以下、別の解釈です。

死という場合、自然死以外、貧しくて飢え死にする人が多かった。

戦前、ジャーナリストの記録に、上海で一晩泊まって、翌朝起きると、道路に何人もの行き倒れがあったこと記しております。大正時代の話です。どうしようもなくて行き倒れる人がいた。ですから、古代においては、それはもう、何人もいたでしょう。

飢え死にと、具体的に解釈するがよろしいかと思えます。これはなかなか当たっているのではないかと思えます。

一般論として、人間は死ぬことになっているんだ、という解釈はやや説得力に欠けると思えます。

孔子は、飢え死にすることは昔からよくあったんだと言ったのでしょう。

最後に残るもの。これが必要だということです。

もし、人々が為政者を信ずることがなくなったら、その瞬間、その国家は解体します。人々が信用しないとなれば、為政者はどうしようもない。

事実、中国の古代国家では、そのような例が山ほどあります。国家が解体しないためには、民衆

が為政者を信頼していなければならない。信頼を失ってはならんということです。

ですから、軍備を少なくし、経済的にも少し我慢してくれと。しかし信頼があれば、国家は保てるということです。

今日で言いますと、会社の経営が苦しくなる。そうであるなら、首を切るということはしないで、全社員を集めて、「会社は苦しいが、首を切ることはしたくない。そこでみんなで、給料2割をカットして、来月からがんばっていこう」と言う。

孔子が言っているのは、そういうことです。「リストラします」これは経営に責任ある人のことばではありませんね。

「信ずる」これが一番大事であると言っているのが、最後のことばです。

「民信ずる無くんば立たず」

信がなければ、政治はやっていけない。

日本の政治家はこのことばが好きです。「民信ずる無くんば立たず」。よく揮毫（^{きごう}頼まれて色紙などに書をかく）している政治家がおります。出典はここにあります。

要するに、孔子は「ものではない。最後は人の心だ」と言っています。政治においては、特に大事であると弟子たちに教えました。

この句では子貢が質問していますが、たまたま子貢が質問したという形で、後に記録されて残っているだけでしょう。周りに他の弟子たちもいて、当然全てを聞いています。

どうすれば人々の信頼を得ることができるのか、そして、そのためにはどう勉強すればいいのかという次の問題が出てきます。孔子の学校で学ぶ意味の、本当に大事なところへ近づいていきます。それは次回からお話しします。

「他者の幸せを求めて」第二回をお話ししました。